



地域の交流の場 ～ふるさと文化芸能祭～

11月3日(祝)文化の日に第42回古牧地区ふるさと文化芸能祭が開催されました。

当日は不安定な天候にもかかわらず芸能部門と展示部門の両会場に530名以上の大勢の皆さんにご来場いただきました。

芸能部門の古牧小学校体育館では、獅子舞、合唱、金管バンド、太極拳、ゴスペルなどが披露され、南部小学校合唱団52名による合唱では、手話を取り入れた発表もあり多くの拍手が送られました。



フィナーレとして大抽選会が行われ、特等賞のスティック掃除機は見事、金管バンドで出演した小学生が当



選し笑顔で商品を受け取っていました。

展示部門の古牧公民館では、書道、絵画、写真、陶芸、生け花など、各地区66名の方々の作品が展示され「この写真はどの様に撮りましたか?」「この作品はどうやって作るのですか?」と作者の方との交流を交えながら来場された方々は熱心に鑑賞されていました。

来年もこの文化芸能祭が開催され古牧地区の皆さんの交流の場となれと思います。

(公民館部)

もう一回 やった!!! ～ふるさとふれあいフェスティバル～



10月5日(日)古牧地区三世代交流ふるさとふれあいフェスティバルが古牧小学校体育館で開催されました。

ここ数年コロナ禍で開催することができなかったこの交流会ですが、5年ぶりに名称を新たにしてお開催されました。

西体育館では古牧12地区による「ボッチャの対

次頁へつづく

前頁のつづき

抗試合」が行われ、東体育館では子どもたち向けの「お祭り広場」が開かれました。

ポッチャには各地区からシニア世代、大人世代、子ども世代の三世代で構成されたチームが参加し和気あいあいと楽しい中でも勝ち負けにこだわった熱い戦いが繰り広げられました。世代の枠を超えて力を合わせ参加者全員が楽しく、そして充実した時間を過ごすことができたようでした。

一方、お祭り広場では射的やストラックア



ウトなどのゲームが行われ、挑戦した子どもたちは「もう一回!」「やったー」と嬉しそうに景品をゲットしていました。

(青少年育成部)

防災意識の向上と地域の安全 ～視察研修を実施～

10月28日（火）から2日間に渡り、総務部主催の名古屋、静岡方面への視察研修が実施され古牧地区の自主防災連絡会役員、環境美化部員40名が参加しました。

最初に名古屋市港防災センターを訪問。施設では1995年に兵庫県を中心に発生した「兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）」の震度7の揺れを再現した起震装置を体験し、地震の恐ろしさを体感しました。自分を守るため「頭を抱えてひざまずく」と安全な姿勢を指導され体験した参加者から「衝撃が怖かった」との声が上がりました。

続いて1959年に東海地方を直撃した「伊勢湾台風」の甚大な被害を再現した3Dシア



原子炉の内部模型

ターの映像を鑑賞し、火災時の煙の中、姿勢を低くし避難をする体験も行いました。また、センターの職員による防災に関する特別講演や各ブースを見学し、災害の怖さと日



起震装置の体験（震度7）

頃の備えの大切さを改めて学びました。

2日目は御前崎市にある中部電力浜岡原子力発電所を訪れ、身分証明書提示や金属探知機での身体検査など厳重なセキュリティ対策の中、同発電所を見学しました。2011年の東日本大震災での津波により被害を受けた福島第一原子力発電所の教訓を踏まえ、原子力発電所の安全対策や防災対策（津波に対する防護壁（高さ25m）の設置など）について職員の説明を受け原子力で電気を作る仕組みと安全性、SDGsなど環境配慮への取り組みなどについて理解を深めることができました。

今回の視察研修はどれも貴重な施設見学や体験を通して、防災意識の向上や地域の安全を守る活動の重要性を改めて感じる有意義な2日間となりました。

(総務部)

第42回 ふるさと文化 芸能祭

芸能部門

神楽

南長池神楽保存会



合唱

古牧女声
コーラス



金管バンド

緑ヶ丘小学校
金管バンド



獅子舞

和田神社
御神楽芸能同志会
子ども神楽会



踊り

上高田
区民有志



太極拳

太極拳古牧



合唱

古牧小学校
合唱部



第42回 ふるさと文化芸能祭

ゴスペル
GS & RDクワイア

芸能部門

合唱

南部小学校
合唱団



古牧地区ふるさと文化芸能祭



抽選会



展示部門



大谷
グローブ

古牧小から借用



折り紙



子ども
たちの
生花展示

体に良い料理作り ～地域デビュー促進事業～

10月21日（火）体に良い料理を作りながら仲間づくりをテーマに、福祉健康部主催の「健康料理教室」が男性4名を含む24名が参加して古牧公民館調理室で開かれました。

この日は、食生活改善推進協議会古牧の伊藤君代先生のご指導のもと同会会員5名のご協力をいただき減塩と野菜摂取増量メニュー「鯖そぼろのビビンバ」「なすと豆苗のカラシ酢味噌がけ」「サンラータン風スープ」の3品を作りました。

参加者は、調理台ごとに6つのグループに分かれ、伊藤先生から準備での留意点や作業の手順などを教えていただき、いよいよ調理開始です。静かだった調理室が一挙に賑やかに。参加者は、鯖の水煮を炒める係り、野菜を茹でる係り、調味料を調合する係りなどに分かれて作業しながら、時折メンバー同士でレシピを確かめ合い手際よく調理を進めていました。



調理開始から1時間半ほどで料理が完成し盛り付けも完了。

その後は、出来上がった料理を

全員でいただく楽しい食事会。「薄味で美味しくできた」と参加者からは笑顔がこぼれ、皆さん満足そうでした。

今回の「健康料理教室」は12月19日（金）午前9時半から「クリスマスメニュー」に挑戦しますので、多くの方のご参加をお待ちしております。（福祉健康部）



地域の環境美化に協力を ～秋のゴミゼロ運動～

古牧地区では「秋のゴミゼロ運動」に合わせて各区で環境美化活動が行われました。

西和田区では10月19日（日）に区民参加のもと区内の用水路の清掃、周辺の草刈りなどの環境整備を行いました。

当日は肌寒い天候でしたが、たくさんの人



集めたパイスケ（ザル）の様子

に参加していただきました。各場所に分かれてスコップ、草刈り鎌などを手に用水路の泥上げ、雑草の処理、落ち葉や枝葉などのゴミ拾いなど、それぞれ皆さんが積極的に作業に取り組んでいただき区内の環境を整備することができ、春のゴミゼロ運動のよりも多いパイスケ（ザル）の量になりました。

秋が深まる中、各家庭の庭木から落ち葉や枝木が出てくる季節になってきます。用水路や側溝などにたまる前に各自で掃除等していただくと助かります。その際に出たゴミは剪定枝葉などのゴミ出しルールを守って集積所に出して下さい。

古牧地区にお住まいの皆さんも環境整備に関心を持ち地区の環境美化に努めていただきたいと思います。

（環境美化部）

木彫青面金剛像（現所在地 北条地蔵庵）

古牧郷土史研究会 傳 田 隆 治

昔、北条地区の東北地域の皆さんが信仰していた庚申講の本尊。北条でも庚申講が江戸時代の中期以降におこなわれていたことはいくつもの庚申塔に刻まれた年（安永5年（1776）、嘉永6年（1853））など令和3年8月ぷらネットこまき第136号参照）によりわかる。この庚申講本尊を祭った庚申講がいつごろから始まったかは分からないが、私の記憶では戦後昭和30年代初めころまではこのご



本尊が講員の家から講員の家へと巡っていた。その後北条地区に都市化の波が押し寄せ、次々と田んぼが宅地となり、本庚申講を解散し、本尊を同地区の地蔵庵

に預け今に至ったようだ。

本尊として青面金剛を掛け軸に描いたものが知られているが、木彫の青面金剛像は珍しいという。この像が造られたのが明治に入ってからなので、それ以前はどのようなものでは分からない。今あるものは高さが30センチメートルほどの木彫で厨子に納められている。「明治24年1月 善光寺武井町大仏師」と台座裏に墨書されている。大仏師の名は判読できない。青面金剛、邪鬼、二童子、三猿、二鶏が彩色され、厨子の中に納まっている。それなりの費用がかかったのではないと思われるが、この時期は、この庚申講本尊（明治24年）のほか、戸隠神社七五三（おしめ）講の発足（明治18年）、地蔵庵の建て替え（明治22年）、北条神楽屋台の制作（明治20年代）、蚕神様石祠（現交通安全神）の建立（明治29年）など文化的なものへの気持ちというか熱が急に高まった印象がある。養蚕、明治維新など地域の経済的基盤の変化、あるいは時代の高揚感であろうか。

しゃばえんびつ



「年末ならではの楽しさ」

本格的な冬の寒さが感じられるようになり、朝晩は特に冷え込みが厳しくなってきました。すでにマフラーやコートをしっかり着込んで出掛けることが多く、すっかり季節が冬へと移り変わったことを実感します。

年末に向けて大掃除や一年のまとめなど少し慌ただしさが増してくる時期でもあります。最近はずいぶん大掃除の準備を始めているので

すが、片付けをしていると昔の写真や思い出の品が出てきて、つい手が止まってしまうことがあります。でもそんな時間も年末ならではの楽しさのように感じます。

無理をしすぎず、ゆったりした時間も大切にしながら過ごしていけたらいいですね。

(嶋田 和紀)



古牧地区の世帯数と人口

令和7年11月1日現在

12,029 世帯

26,072 人

(男 12,869人 女 13,203人)

■発行所 古牧地区住民自治協議会
(電話259-8359・FAX219-1057)
(E-mail: komaki@vivid.ocn.ne.jp)

■発行者 柴 芳夫
■編集 ぷらネットこまき編集委員会
■印刷 (有)小池印刷



HP
ご覧ください